

第5章 歴史的・文化的背景

1 歴史的変遷

西三河随一の大河である矢作川には大小の支流が注ぎ込み、矢作川流域と呼ばれる広範な範囲に多様な歴史文化が花開いていきました。恵まれた自然条件を背景に原始古代には重要な遺跡が随所に展開し、水陸交通の結節点となり西三河の中心として発展していきます。中世以降には源氏や足利氏の重要拠点であったことを古刹こまの社寺に残る建造物等が物語り、戦国期には家康公が岡崎城内で誕生し、家康公生誕の地岡崎の繁栄は近世岡崎の発展へと引き継がれていきます。

本市の歴史的・文化的背景を、歴史文化資産や歴史文化の成立に深く関わりと考えられる出来事を中心に、歴史の変遷を辿ることから紐解きます。



(1)原始

旧石器・縄文・弥生時代

岡崎市内の旧石器時代の遺跡は、北部の矢作川左岸や東部の乙川流域の河岸段丘^{かがんだんきゅう}上に分布しています。山間地の開けた場所にある西牧野遺跡(榎山町、牧平町)からは旧石器時代の石器類が多数出土し、安定した暮らしが営まれていたことがうかがえます。乙川左岸の五本松遺跡(美合町)では、後期旧石器時代から弥生時代の石器や土器が見つかり、矢作川と乙川の合流点付近の真宮遺跡(真宮町・六名一丁目)では、縄文時代晩期の集落を中心に人々の生活が鎌倉時代まで連綿と続いていました。矢作川は古くは流路を様々に変化させる河川であり、多くの自然堤防を造り出していました。そこが縄文時代以来、人々の生活の場として活用されます。特に新来の稲作技術を導入し、農耕を始めた弥生時代以降には、その生産特性を活かし低湿地を水田とし、自然堤防上に集落が営まれていったものと考えられます。

古墳時代

本市における古墳の多くは、いずれも矢作川や支流の乙川、巴川、北斗川、真福寺川、青木川に沿った場所に所在しています。古墳時代前期の4世紀後半から中期の5世紀初頭に造営された前方後円墳の和志山古墳(西本郷町)や、甲山第1号墳(六供町)はその規模や立地等から地域を支配した首長の墓であると推察されており、当時、統治社会が形成されていたことを示しています。古墳時代中期の5世紀中頃には、首長墓はやや小型化し、太夫塚古墳(若松町)や経ヶ峰第1号墳(丸山町)等が河川交通の要所に臨む場所に築かれました。古墳時代後期の6世紀代以降に築造された古墳は群集墳を形成し、直径10~20メートル程度の円墳が多く、約200基を数えます。神明宮第1号古墳(石室長11.8メートル、丸山町)、岩津第1号古墳(石室長10メートル、岩津町)は、西三河最大規模の横穴式石室を誇り、これらの古墳は地域で中心的地位を占めた人物の墓と推察されています。

(2)古代

飛鳥時代

仏教文化の伝来や律令国家による古墳づくりの規制により、寺院をつくるのが権力誇示の手段となり、7世紀後半に矢作川右岸の渡河点付近である北野に四天王寺式の伽藍^{がらん}を持つ寺院が建立されます。寺院の瓦は、矢作川流域から遠く長野県飯田まで広がり、周辺の仏教文化に影響を与えました。この時代愛知県は尾張国造、三河国造、徳国造の勢力下で3つの地域に分かれ、岡崎を含む西三河周辺は三河国造が支配していました。最初の三河国造は『先代旧事本紀』に物部氏の祖先と結び付くとされる知波夜命^{ち は や の みこと}が記され、また真福寺(真福寺町)には物部氏による創建伝説があることから、物部氏と古くから関係があったと考えられています。



図5-1 北野廃寺跡

奈良時代

三河国には律令国家が整備した七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)の一つである東海道が通っていました。要所には、駅制に基づく国の施設である駅家が30里(約16キロメートル)毎に設置され、中央に急を知らせる駅馬を常備していました。市内には碧海郡の鳥取(捕)駅家、額田郡の山綱駅家の2つの存在が考えられ、鳥取駅家は小針町付近にあった驚取郷に隣接する宇頭町から矢作町のどこかに存在したとされ、一方、山綱駅家は、山綱町にその地名を残していることから、山綱町を含むその周辺地域に存在していたと考えられています。

平安時代

11世紀後半、三河国では近親者が三河守を歴任した藤原季兼すえかね・としかねが開発領主として居住し、市域の農地開発を行っていたと考えられています。季兼は熱田大宮司尾張員職たいぐうじおわりかずもとの娘、松御前まつごぜんと結婚し、晩年は尾張国の目代もくだい(国司の下級役人)も務めました。季兼の子の季範は、熱田神宮大宮司職の地位を譲り受け、さらに、尾張国の目代もくだいにもなったことから三河と尾張の2つの国に拠点を得ることになり、藤原氏が勢力を拡大し、これまでこれらの地を支配していた物部氏との勢力交替が起きました。

(3)中世

鎌倉時代

藤原季範の娘、由良御前ゆらごぜんと源義朝みなものよしともの子で鎌倉幕府を開いた源頼朝みなものよりともは、全国支配の中で政治的・軍事的に重要視した三河国の守護・地頭に有力な御家人を任命します。三河守護に任じられた足利義氏の屋敷には4代将軍源頼経みなものよりつねが宿泊し、その一族や家臣達の屋敷や額田郡公文所も矢作宿あしかがよしうじの辺りに並んでいたと考えられています。東国武士の三河進出はめざましく、源氏と三河国の武士の結びつきは強くなり、足利氏や家臣の一族が後の三河武士の源流となっていきました。

また、三河では鎌倉時代後期までは真福寺、滝山寺、高隆寺等の天台宗の勢力が強く、これが土壌となり建長8年(1256)、親鸞しんらんの弟子である顕智けんちらが矢作薬師寺じょうどんしんじゅうで浄土真宗を伝え、三河に広まっていきました。一方、足利氏が帰依した臨済宗は額田等三河山間部へ広まり、将軍の勅願所である天恩寺等が建立されました。

この時代、京都御所と鎌倉幕府を結ぶ重要な道であった東海道(鎌倉街道と通称されている)において、京都から数えて26番目の宿駅である矢作宿は矢作川をはさんで東西に位置し、交通の要衝として大いに繁栄しました。当時の矢作宿は政治・経済・文化の中心地として近世城下町とは異なる商業中心の町を形成していました。

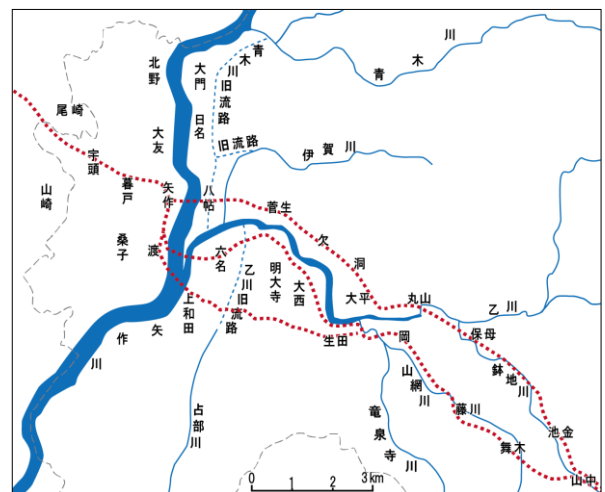


図5-2 中世の東海道(鎌倉街道)推定図
(出典：新編岡崎市史)

室町時代

鎌倉幕府打倒を計る後醍醐天皇ごだいごを討つため、京都に向かった足利尊氏は三河八橋で一族の吉良氏と相談し、幕府に反し後醍醐天皇に味方する決意を固めたといわれています。その背景には足利義氏から尊氏に至る6代が三河守護を務め、一族・被官が三河に勢力基盤を築いていたことがあります。建武政権樹立後、足利尊氏は後醍醐天皇と戦うこととなりますが、その時も三河を前線基地に選び、両軍、矢作川をはさんで合戦を繰り広げました。三河に分立した仁木、細川、吉良などの一族・被官たちが、尊氏軍の中核を担いました。

室町幕府を開設した足利尊氏は、筆頭家臣の高氏こうしを三河守護に任命しました。しかし、高氏一族は足利氏と対立、没落しました。そのあとは足利一族の仁木義長にっきよしなが、大島義高よしたかが守護となり、一色氏からは範光のりみつ、詮範あきのり、満範みつのり、義貫よしつらの4代が、60年間在任しました。三河には将軍直属の奉公衆約40家が所領を持っていました。岡崎市域や周辺では岩掘・丸山・小島・彦部・大草・山下氏が知られています。

一色義貫が将軍・足利義教よしりのの命で殺されると、三河守護職は細川持常もちつねについて、甥の成之しげゆきに与えられました。

戦国時代

応仁元年(1467)、将軍・管領家の後継ぎ問題に端を発し、天下を二分する応仁の乱が起こりました。三河における応仁・文明の乱は、松平氏・戸田氏のような新興勢力の台頭と、一色氏のような旧勢力の衰退を引き起こします。

徳川家康公の祖先である松平一族は、加茂郡松平郷に登場した松平親氏を初代とし、松平氏発展の基礎を築いたのは松平3代信光でした。信光は額田郡一帯に勢力を広げ、安城・岡崎城を手に入れて西三河の多くを支配するに至ります。岡崎城は、明大寺に屋敷城を築いた西郷頼嗣（稠頼）が、享徳元年(1452)～康正元年(1455)に菅生川北岸の龍頭山(現岡崎城)に築いた砦をはじめりとし、頼嗣は松平信光に屈服し、信光の子光重を婿（養子）に迎えて所領額田郡大草へ隠棲したといわれています。

享禄3年(1530)～4年(1531)には、家康公の祖父にあたる松平清康が龍頭山の岡崎城に松平氏の本拠地を移します。西三河では、松平庶家が、信光より家督を相続した親長のほか、岡崎の光重、安城の親忠、竹谷の守家、五井の忠景、形原の与副等に分立し、その後、松平4代親忠、5代長親、6代信忠の時にも支配地に一族を配置し、松平の勢力を広げていきました。

松平氏の歴代の家臣は「譜代」といわれ、近世においても重要な役割を果たしました。中でも三河譜代といわれる家臣団は、広くは家康公の岡崎在城時代までに、狭くは清康の代までに服属した者を指し、後に徳川四天王（酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政）、十六将と呼ばれる者も名を連ねています。これら三河譜代は幕府成立後も譜代大名、旗本となり、幕府の政治の中核を担っていきました。

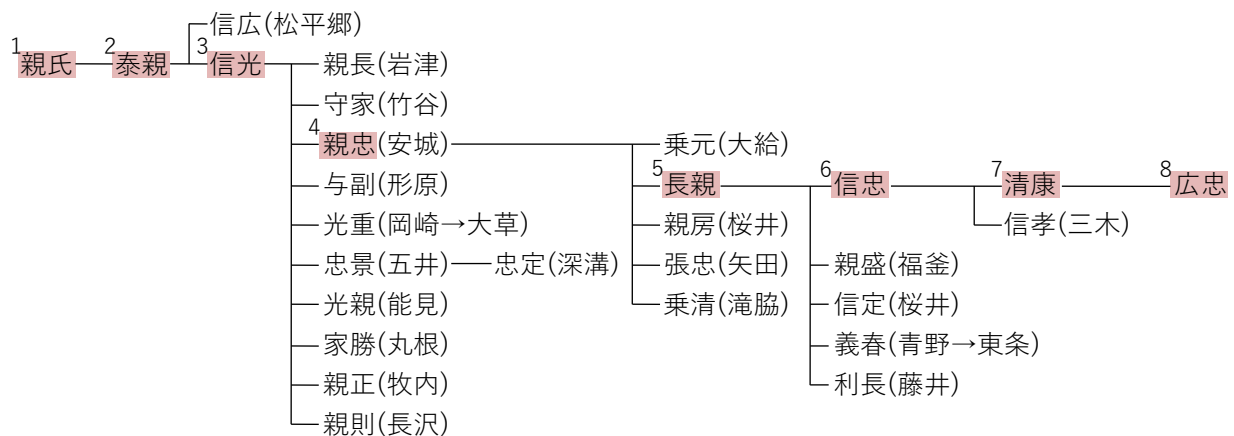
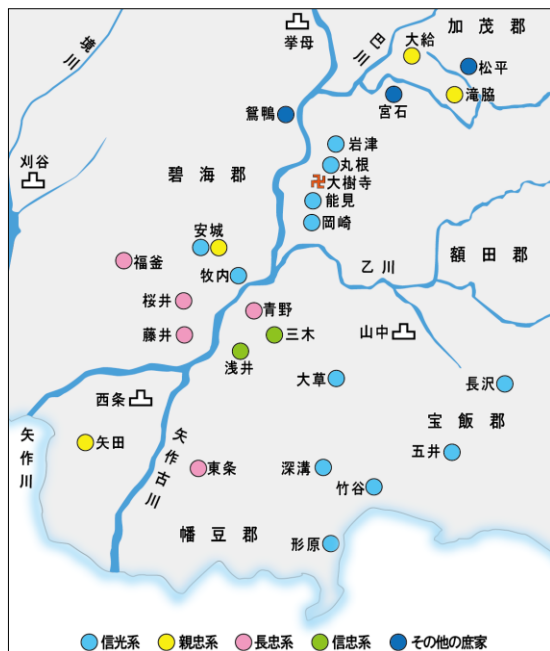


図5-3 松平八代系図



松平氏は家康公に至るまでの間に多くの庶家を分立しました。そのうち主要庶家を特に「十四松平」と呼んでいます。

竹谷、形原、岡崎（のち大草）、五井、深溝、能見、長沢、大給、滝脇、福釜、桜井、青野（のち東条）、藤井、三木。これらの庶家は家康公の時代に存続しており、天下統一の覇業を支えました。

図5-4 松平一族分封図 (右図 出典：三河武士のやかた家康館常設展示解説書)

松平氏はその勢力拡大とともに各地に寺院を建立したため、市内には特に松平氏、徳川家が創建に関わった社寺が多く存在しています。松平3代信光建立の萬松寺、信光明寺、妙心寺(現円福寺)、松平4代親忠建立の大樹寺(松平宗家の菩提寺)、伊賀八幡宮、松平7代清康建立の六所神社、龍海院、家康公建立の松應寺、随念寺等が挙げられます。

天文4年(1535)「守山崩れ(※1)」により松平清康を失った松平一族では対立と分裂が起こり、天文9年(1540)、尾張の織田信秀が三河への進出を本格化させました。このような状況の中天文11年(1542)に岡崎城内で竹千代(家康公)が誕生します。天文18年(1549)、8歳の竹千代が今川義元の命により人質として駿府に送られると、同年、松平広忠が殺害された松平領国は義元の支配下に入ります。岡崎城代には今川氏の有力な家臣が入り、約10年間にわたる今川氏の西三河支配が幕を開けました。竹千代は14歳で元服して元信と名乗り、弘治3年(1557)、義元の姪にあたる瀬名姫(築山殿)を娶り、元康と改名します。

永禄3年(1560)、桶狭間の戦いで義元が織田信長の急襲を受けて戦死すると、元康は岡崎に逃げ帰り大樹寺に入り、今川勢が岡崎城から撤退すると帰城しました。永禄4年(1561)、織田と和睦し西三河南部をほぼ自らの支配下とした元康は、翌永禄5年(1562)、清須城で信長と同盟を結び東三河への進出を始めます。永禄6年(1563)、元康は家康に改名し、今川氏からの完全自立を図りました。

同年、15世紀後半の蓮如上人の布教により隆盛した一向宗(真宗本願寺派)寺院の不入の権を家康公の家臣が無視したことから、門徒(一家衆寺院の土呂本宗寺、三河三カ寺の佐々木上宮寺、針崎勝鬘寺、野寺本證寺)との間で三河一向一揆が勃発します。翌7年(1564)に一揆が解体されると、天正11年(1583)までの19年間三河は真宗禁制の地となりました。

※1 守山崩れ：尾張国守山で、織田信秀と対陣していた松平清康が家臣阿部弥七郎に刺殺され、安城松平家によって進められていた三河領国の統一が崩壊したことをいう。

(4)近世

安土桃山時代

天正18年(1590)の家康公関東移封後は豊臣重臣の田中吉政が岡崎城主となります。江戸時代初めに本多康重が任ぜられてからの城主は代々譜代大名が務め、本多家4代(前本多家)、水野家7代、松平家1代、さらに本多家6代(後本多家)の計19名が岡崎城主となり、279年間、岡崎を治めます。特に、田中吉政は、大土木事業により城下町の整備を行い、それを堀と土塁で囲む総構えとし、近世の大城郭の基礎を築きました。

江戸時代前期

慶長6年(1601)に藩主となった本多康重を始め、3代の城主は吉政による城下町整備を引き継ぎ、矢作橋や東海道の整備、町人たちの大規模な移住等を行いました。伝馬制の制定と矢作橋の完成に伴い、菅生川の南側を通過していた東海道が城下へ引き入れられます。変更が重ねられた東海道は、慶長14年(1609)以降、まちの防衛と街道筋の伸長のために曲がりくねり、「東海道岡崎城下二十七曲り」と呼ばれる街道となりました。また、矢作川と菅生川(乙川)では舟が行き交い、東海道により物資・文化が往来して城下町・宿場町として繁栄を遂げます。こうした整備により岡崎城は家康公の生誕城として、5万石の石高に比しては大規模な城郭を備えることとなりました。

正保2年(1645)、岡崎藩主になった水野忠善は城下町整備を完成させ、総構え内の町人を移住させ侍屋敷を作り、東海道沿いには「岡崎城下町廻り」又は「岡崎宿廻り19か町」と呼ばれる19の町を設けます。その様子は明治維新まで変わらずに受け継がれました。

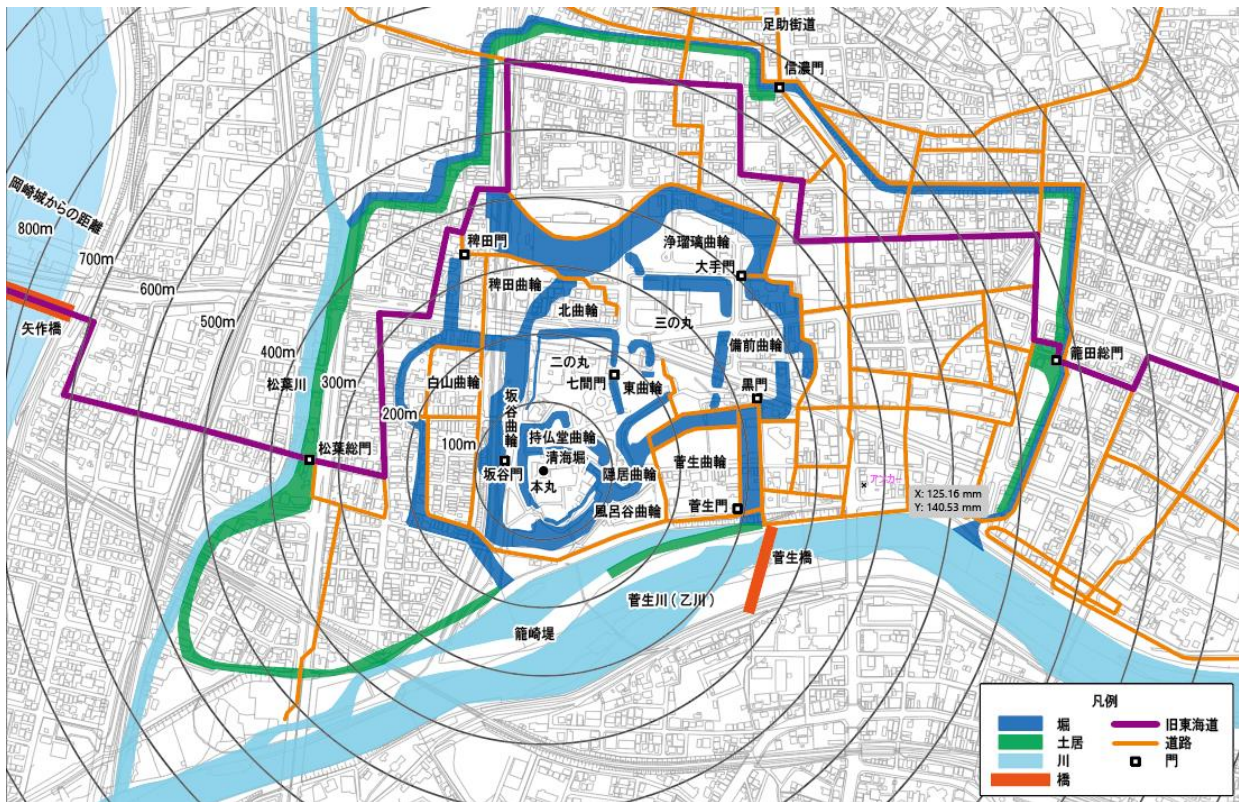


図5-5 岡崎城郭

本市には多数の社寺がありますが、これらの多くは家康公等が与えた「朱印状」を持つ社寺でした。朱印状（領地朱印状）とは、將軍の代替わりに公家や武家等の所領を確定する際に発給したもので、岡崎では特に松平氏や徳川家にゆかりのある社寺に朱印状が与えられ、幕府公認の領地を持った社寺が多数見られました。岡崎城下では徳川家先祖の菩提寺である大樹寺を始め、滝山寺、真福寺、甲山寺等があります。また、城下町周辺にも多数の社寺があり、周辺は門前町として栄えていました。

これらの社寺は、家康公が將軍になったことにより一層寺格や社格が高められ、幕府によって修理、援助を受けました。特に大樹寺は別格の扱いとなっています。さらに、徳川3代將軍家光は祖父家康公に対する畏敬の念が厚く、自らも滝山東照宮を建立するとともに、松平氏・徳川家ゆかりの大樹寺、伊賀八幡宮、六所神社、松應寺で大規模な造営工事を行いました。これら一連の造営は「寛永の大造営」といわれ、本市に近世前期の優れた建築物が多く残されているのは、この大造営が一因に挙げられます。

岡崎の藩領は、家康公による関ヶ原の戦いでの大名の手柄等の調査と大規模な領地替えの結果、額田、碧海、幡豆、加茂の4郡内に決められます。しかし、現在の市域には岡崎藩以外の領地も多数あり、奥殿藩(1万6千石)、西大平藩(1万石)がそれぞれの領地を支配し、松平氏・徳川家ゆかりの社寺も領地を持っていました。旗本領も多くあり、享保の改革を行った水野忠之(藩主時代 1699~1730)の時代である享保10年(1725)には、知行地を持つ旗本が、三河国内に86家、現在の岡崎市域内に14家ありました。

江戸時代中期・後期

西三河を北から南へ流れる矢作川は、大量の物資を安い費用で運ぶ上で有力な経済の道であり、城下を通る東海道は、交通の大動脈として機能していました。このため中継地となる岡崎の地は大いに発展し、様々な産業や文化が花開くこととなります。

城下町には主に職業と密接に関連した名前が付けられ、材木町(鍛冶屋、大工等の職人町)、魚町(魚問屋)、田町(塩、海産物等を扱う商人町)といった名称は今も岡崎の町に残され、城下町の風情をまちに留めています。そのうちのひとつである連尺町は城の大手門近くを開かれた市場をもとに形成され、近世を通じて城下町の中心となりました。連尺という名称は行商人の「背負い子」がもとであるといわれ、酒、油、穀物等の日常品を扱う大きな商家が軒を連ねていたといえます。

江戸時代中期から後期になると、岡崎には石材加工、八丁味噌、綿作(三河木綿)等の代表的な産業が定着するとともに、旅籠屋、鍛冶屋、桶屋、荒物屋、指物屋、穀屋、煙草屋、大工、左官、道具屋、茶屋など様々な商売を営む者があふれ、まちが大きくなっていきました。城郭整備等に携わっていた石工たちは岡崎の良質な花崗岩を用いて鳥居や燈籠等の石材加工を行うようになり、現在の岡崎石工品へと連なっていくます。戦国時代に携行食として重宝された味噌は生産地八町村(八帖町)の名から八丁味噌と呼ばれ、岡崎の郷土食として矢作川の舟運を通じて全国へ広まっていきました。矢作川の洪水による土砂が積もった畑は、綿作に切り替えられ全国有数の産地となり、三河木綿として名が定着します。また、稲富流火術に端を発する三河花火は多くの煙火師を擁するに至り、豊作祈願や祭礼の花火として発展しました。こうした農業や商工業が飛躍的に発展することで、まちには賑わいが増し、菅江真澄(文人)、鶴田卓池(俳人)、月僊(画家)等の文化人が集まるなど、様々な文化が花開いていきます。

14代将軍徳川家茂の死後、15代将軍となった慶喜は慶応3年(1867)に大政奉還し、翌4年(1868)旧幕府軍と倒幕軍による戊辰戦争が始まります。岡崎藩は幕府支持の態度をとりつつも、内部には旧幕府軍(旧幕府派)と倒幕軍(朝廷派)のそれぞれを支持する意見がありました。藩意は朝廷派で統一されましたが、旧幕府派の藩士が脱落し両派に分かれて戦うこととなります。明治2年(1869)、1年5か月続いた戊辰戦争が終わり、新しい時代が幕を開けました。



図5-6 石材店が軒を連ねる石屋町通り(昭和初期)

(5)近代

明治時代

明治4年(1871)7月、明治政府による^{はいはんちけん}廃藩置県により、岡崎藩は岡崎県となりました。同年11月には三河各県と尾張^{ちたぐん}知多郡が統合されて額田県となり、県庁が旧岡崎城内に置かれます。しかし、明治5年(1872)11月には愛知県に統合され、額田県は1年ほどで廃止されました。

明治6年(1873)に廃城令が出されると、岡崎城では天守を始めとする建造物が同年～7年(1874)にかけて取り壊されます。岡崎城跡は明治8年(1875)、日本丸城跡が城址公園として残されることになり、大正8年(1919)以降は旧二の丸跡地を含めた一帯が公園として整備され、現在の岡崎公園となりました。

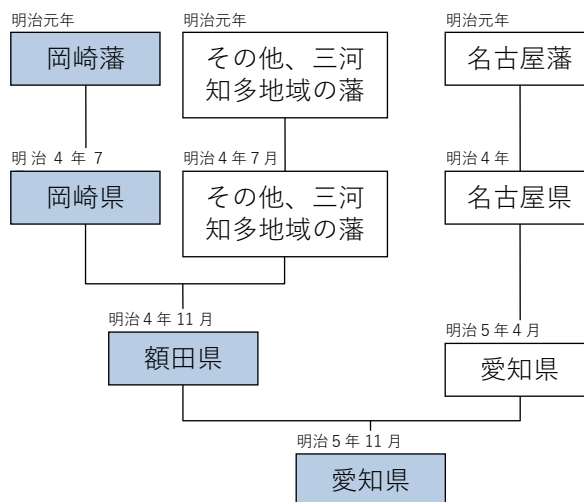


図5-7 額田県の成立と廃止



図5-8 旧岡崎城天守(明治5年(1872)、南東方向より)

江戸時代から綿の生産地として有名であった岡崎では、明治時代になって発明された水車等を動力とする「ガラ紡」という^{ぼうせきき}紡績機が、この地域の流れの速い川で利用できたため普及しました。それと並行して明治政府が^{しよくさんこうぎょう}殖産興業の政策として、「官営愛知紡績所」(現大平町)を設置したことから紡績業が発達します。

明治21年(1888)には東海道本線岡崎駅が開業し岡崎の物資が鉄道を利用して運ばれるようになり、市内の産業は一層発展しました。明治31年(1898)、岡崎駅と市街地を結ぶ岡崎馬車鉄道が開通し、同44年(1911)には、岡崎・西尾方面への重要な交通機関となる^{せいさんきどう}西三軌道株式会社が開業します。



図5-9 ガラ紡水車(桜井寺町)

大正・昭和時代(戦前)

大正5年(1916)7月1日、岡崎町は岡崎市となり、愛知県では名古屋、豊橋に次いで3番目、全国では67番目の市制施行を迎えます。当時の市域面積は19.68平方キロメートル、人口は37,639人でした。

大正末期、愛知電気鉄道(後の名古屋鉄道)の開通や岡崎電気軌道(路面電車)の軌道延長など公共交通が充実するとともに、これまで成長を見せていた紡績業(ガラ紡)から製糸業への転換、農村部から都市部への人口流入等により、康生町を中心とする町では西洋風の建物が並び、近代的な公園や病院が整備されて様相が大きく変化しました。また自動車が普及し始めたことから道路網の整備が進められ、曲がり角が多く不便な道路であった国道1号は、昭和8年(1933)に幅員21.6メートルの幹線道路に変わるなど、社会基盤が整っていきます。

昭和16年(1941)、日本のハワイ真珠湾攻撃により始まった太平洋戦争は、昭和18年(1943)を境に戦況が悪化し、昭和20年(1945)7月19日から20日にかけて行われたアメリカ軍のB29爆撃機による焼夷弾を中心とした12,000発以上の爆撃により、市中心部の近世以来続いた城下町は一瞬にして焦土と化しました。



図5-10 本町通りを北からのぞむ



図5-11 空襲の焼け跡にたたずむ菅野市長

(6)現代

昭和時代(戦後)

昭和21年(1946)9月、本市は、名古屋市、豊橋市、一宮市とともに戦災都市として国の指定を受け、戦災復興事業を進めることとなります。主に、狭く曲がりくねった城下町時代の町割りを近代的なものにするために、土地区画整理事業が進められ、碁盤目状の道路網整備や籠田公園を含む8つの公園の整備、拡張が昭和32年(1958)に完了し、現在の本市における中心市街地の原型が形作られました。

昭和30年(1955)、町村合併促進法を受けて、岡崎市は矢作町及び額田郡2町6村(岩津町、福岡町、本宿村、山中村、藤川村、龍谷村、河合村、常磐村)を編入し、昭和37年(1962)には六ツ美町を編入します。これらの合併により市域面積を合併前の約4倍の226.97平方キロメートル、人口を約1.8倍の185,959人に増大させました。

平成時代

高度経済成長期の中で、自然と産業と市民生活の調和のとれた都市づくりを目指し、各種都市基盤の整備を進めてきた本市は、平成15年(2003)4月1日に全国で31番目に中核市に移行します。

平成18年(2006)1月1日、岡崎市は額田町と合併し、面積387.24平方キロメートル(令和2年(2020)現在は387.20km²)、人口367,518人、世帯数138,137世帯の新しい岡崎市が誕生しました。

2 自然的・文化的特性

先に概観した歴史的変遷を経て、本市には数多くの史跡や建造物、美術工芸品をはじめとする文化財が今に引き継がれ、伝統行事や祭礼、産業、食、信仰等が現在もまちのいたるところに息づいています。本市の歴史的・文化的背景を、形成の基盤となる自然環境、人々の営みの足跡である都市構造、今に受け継がれる文化財等の順に読み解きます。



図5-12 自然的・文化的特性の読み解き

(1) 自然環境

地質

中心部から北東部の山地を形成するのは白亜紀に作られた^{かこうがん}花崗岩類であり、良質の花崗石が採れたことから江戸時代より石製品づくりが盛んとなり、石都・岡崎として発展を遂げました。南東部の山地を形成するのは同じく白亜紀に作られた^{へんせいがん}変成岩類であり、丘陵地には新第三紀に作られた砂岩、シルト岩、^{れきがん}礫岩が分布しています。平野部には第四紀に作られた礫・砂からなる段丘堆積物が分布し、平野部の西側は矢作川が運んできた礫、砂、粘土が堆積してできた^{こうせきそう}洪積層や^{ちゅうせきそう}沖積層により形成されています。

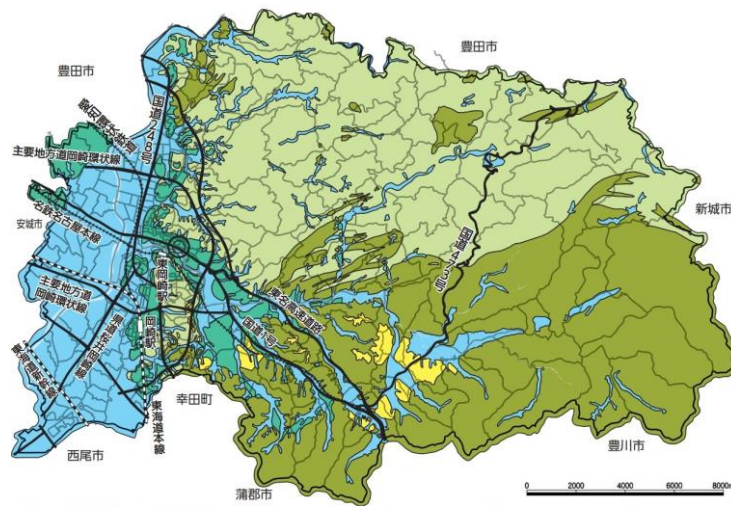


図5-13 地形・地質

| 百万年前 | 地質年代 | 地質名 岩石名 | 凡例 | 地質の特徴 | 地形区分 |
|------|--------------------|--------------|----|---|--------------|
| 0.01 | 完新世 | 沖積層 | A | 低地を形成する未固結な砂、れき、粘土などです。 | 低地部 山間低地部 |
| 2 | 第四紀 更新世 | 洪積層 | D | 低地の周辺に分布する段丘を形成する砂れき、砂、粘性土などです。沖積層よりは締りのよい地層です。 | 台地 |
| 65 | 新第三紀 鮮新世 中新世 | 新第三紀層 | Tn | 丘陵地を形成する半固結～固結した砂岩、シルト岩、れき岩などです。 | 丘陵地 |
| 77 | 白亜紀 | 領家新期 花崗岩類 | Gr | 山地を形成する岩盤です。花崗岩類と変成岩類が分布します。いずれも新鮮部は硬質ですが、地表部付近では、割れ目が発達し、割れ目に沿って風化が進んでいます。 | 山地部 |
| 100 | | 領家 変成岩類 | Ry | | |

動植物

本市は山間部の一部を除き照葉樹林帯に属しています。人為影響を受けていない原始林は市域にはみられず、丘陵地～山地の大部分はアベマキ・コナラ等を主体とする二次林や、スギ・ヒノキ等の人工林で覆われています。平野部のほぼ全域は、市街地と水田や畑地、果樹園となっています。人為影響の比較的小さい自然林としては、シイ・カシ林が社寺林や川沿いの崖地、山地部にわずかにみられます。

本市を特徴づける要素として、主に東海地方の丘陵地に特徴的にみられる東海丘陵要素植物があります。その多くが絶滅危惧種に選定されており、生育地を含めた保全対策が望まれています。本市においてはこれらの植物が、丘陵地の谷部に発達した湿地に局所的にみられることが知られています。特に、北山湿地や小呂湿地には、ミズゴケ類やモウセンゴケ、ミミカキグサ類、サワギキョウなどの湿地特有の植物が多く見られ、ハッチョウトンボやヒメタイコウチなどの昆虫が生息しているほか、北山湿地周辺はギフチョウの貴重な生息地となっています。また、市内には、国の天然記念物に指定されているゲンジボタル発生地のほか、ホトケドジョウやメダカなど絶滅危惧種となっている魚類が生息しているところもあります。

(2)天然記念物

豊かな水辺空間を象徴する文化財として、国指定天然記念物岡崎ゲンジボタル発生地と、市指定天然記念物である額田地区のゲンジボタル、県指定天然記念物北山湿地が挙げられます。岡崎ゲンジボタル発生地、額田地区のゲンジボタルはともに保存会による熱心な保護増殖活動が図られています。また、北山湿地はオオミズゴケやヒナノシャクジョウ等の湿地性植物、ハッチョウトンボやギフチョウなどの昆虫が生息する貴重な環境であり、こちらもおかざき湿地保護の会を中心に湿地の環境を維持するための保護活動が図られています。

本市の天然記念物の指定としては、県、市指定共に植物の件数が多く、特に巨樹及び名木等の樹木の指定が多くを占めています。これらの樹木は地域の景観を形作るシンボルとして長く親しまれ、本市の歴史を物語る存在となっており、東海道沿いの藤川の松並木や、推定樹齢 300 年の下山小学校のヤマザクラなど、地域の人々に今も愛される樹木が数多く存在しています。また、奥山田のしだれ桜や五万石ふじなどの、開花期には例年多くの観光客が訪れる名木も天然記念物に指定されています。

地質・鉱物に関する天然記念物としては、ごばん山^{だいさんまつはしよくきよれきぐん}第三紀末波蝕巨礫群および牛乗山第三紀末波蝕巨礫群が挙げられます。いずれも領家変成岩類に属する石英片岩や雲母片岩からなる巨礫や砂礫が露出し、その表面は波の影響で磨かれていて、三河地方の地殻変動の様子が垣間見える天然記念物です。

昆虫類としては、岡崎城跡の石垣に生息するキシノウエトタテグモや、太古の時代からの残存種と考えられ、山中八幡宮に生息する暖地系のセミであるヒメハルゼミの生息地が指定されています。



図 5-14 岡崎ゲンジボタル発生地

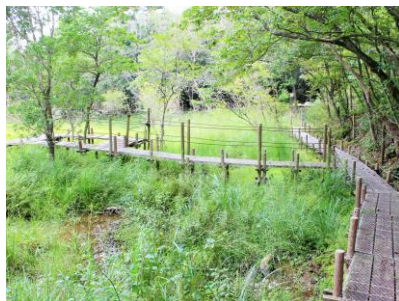


図 5-15 北山湿地



図 5-16 藤川の松並木



図 5-17 下山小学校のヤマザクラ



図 5-18 奥山田のしだれ桜



図 5-19 五万石ふじ



図 5-20 牛乗山第三紀末波蝕巨礫群



図 5-21 キシノウエトタテグモ生息地



図 5-22 山中八幡宮のヒメハルゼミ生息地

(3)岡崎城下町の成り立ちと都市の構造

中世末期～近世初期の岡崎城下

-天正 18 年(1590)～慶長6年(1601)頃-

豊臣政権下において豊臣家臣の田中吉政は、関東の徳川家康に備えて城の東側を守る事ができる城郭の整備、約 2,500 人の家臣が暮らす城下町の整備、矢作川の築堤等を行いました。特に城下町全体を取り囲む堀と土塁を築き、総構え(総曲輪)とし、板屋、松葉、田、材木、肴町等の商人や職人が住む町を造りました。また、東海道沿いの連尺、材木、肴、田、板屋と六地藏、福島各町を除く総構え内は武士の屋敷地としました。

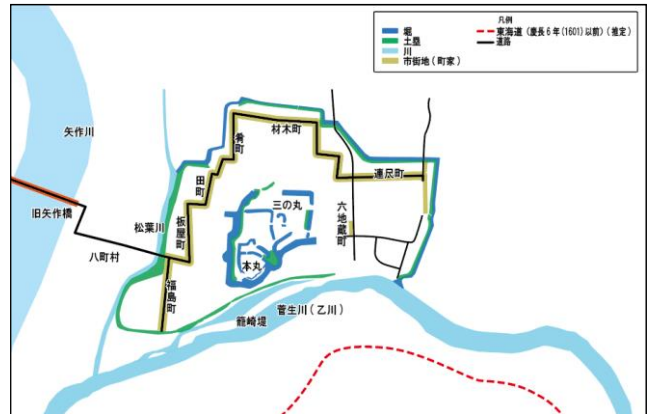


図 5-23 慶長 6 年 (1601) 前後の城下町

近世の岡崎城下

-慶長6年(1601)～正保2年(1645)頃-

田中吉政により始められた岡崎城下の整備はその後の岡崎藩主に引継がれ、徐々に城下町が形成されていきます。菅生川(乙川)の南を通っていた東海道は吉政により城下内に引き入れられ、防衛のための屈曲した形状は、現在も「東海道二十七曲り」と呼ばれています。市街地は連尺町の東に徐々に広がり、籠田町、伝馬町が新たに設けられました。また、東海道から城下への出入口には、東に籠田総門、西に松葉総門を始めとする門が整備され、侍屋敷と町家の境となる郭木戸が設けられました。菅生橋の整備もこの頃です。

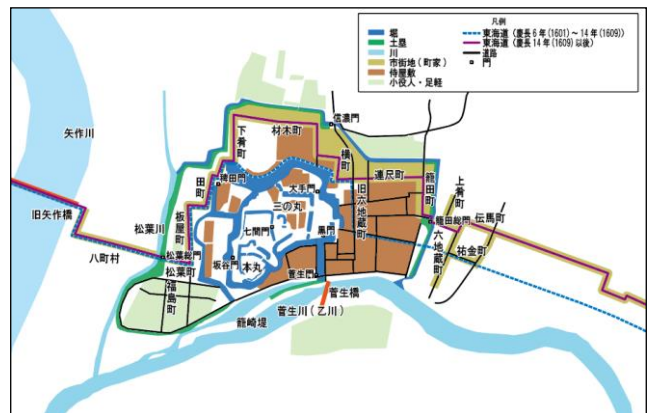


図 5-24 正保 2 年 (1645) 頃の城下町

近代における市街地

-明治 26 年(1893)頃-

明治初期、愛知県は全国一の綿の産地であったため、岡崎では紡績業が発達し繊維の町として発展しました。また、明治 20 年(1887)頃からは製糸業が急速に発達しつつ、産業革命の時代を迎えたこともあり、岡崎は大きく発展しました。岡崎城下町を形成していた堀や土塁等は除かれて道路や住宅地となり、市街地が広がります。特に、北へ延びていた旧足助街道沿いや伝馬町の東に延びる旧東海道沿いに市街地が広がっていきました。

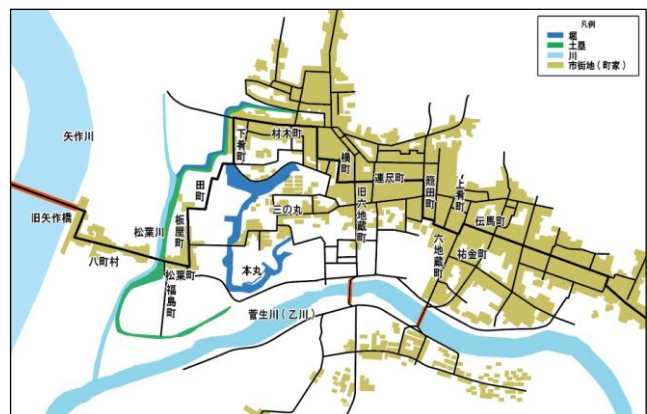


図 5-25 明治 26 年 (1893) 頃の市街地

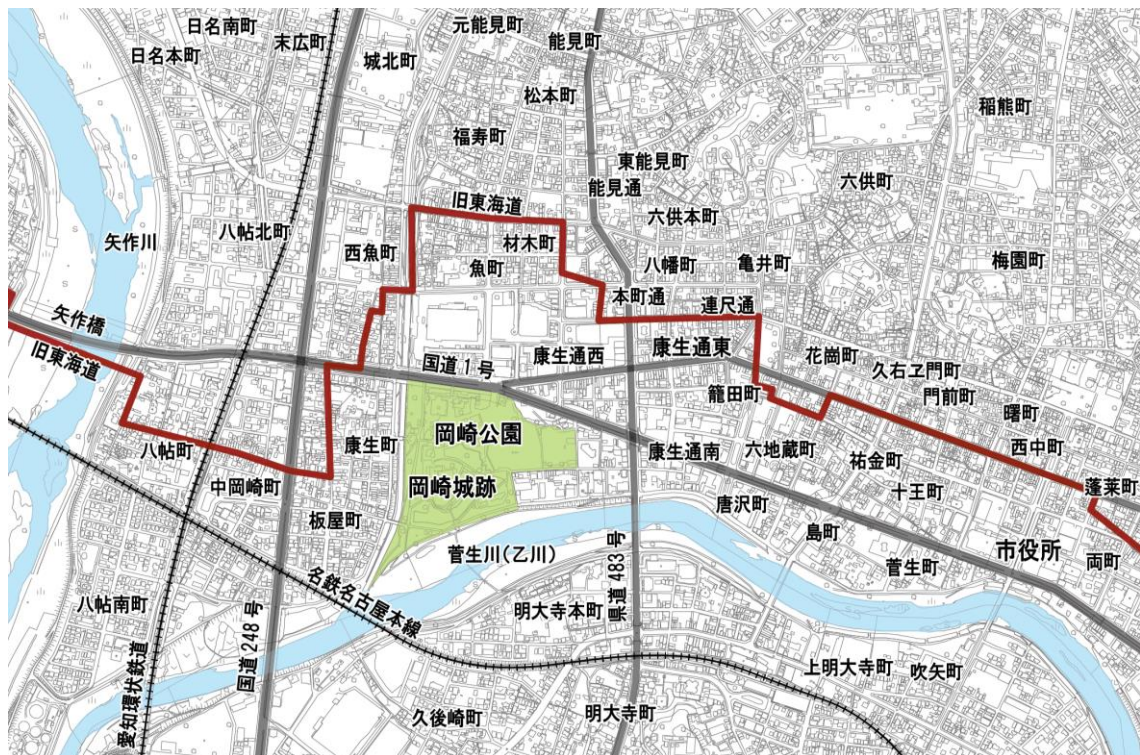


図5-26 現在の岡崎市街地と旧東海道

現在の岡崎市街地

明治・大正時代に大きく発展した岡崎城下町は、昭和20年(1945)7月、太平洋戦争下において、空襲により町のほとんどが焼き尽くされてしまいました。

岡崎市では、昭和21年(1946)～昭和33年(1958)に戦災復興土地区画整理事業により南北の県道39号と東西の国道1号を主要道路とする基盤目状の道路網整備が行われ、現在の中心市街地の原型はこの事業によりできあがりました。なお、名鉄名古屋本線は、その前身である愛知電気鉄道が昭和2年(1927)に神宮前-豊橋間を開通しています。

(4)用水・耕地整理

矢作川は流域の低地部に居住する人々に多大な洪水被害をもたらした一方で、氾濫がもたらす肥沃な大地は水田や畑に適しており、人々は沖積低地を利用して耕地を拓き、洪水により形成された自然堤防上に住居を構えて生活を営んでいきました。平野部の田園風景が広がる本市南西部、六ツ美地区には、耕地への導水のため矢作川流域で初めて開通したとされる占部用水（慶長8年(1603)竣工）が存在し、改修されつつ今なお使用されています。また、明治初期に着手し昭和33年に完成した高橋用水は、高橋町地内を水源に六ツ美地区を経て西尾市まで用水を供給しています。

六ツ美地区は明治33年(1900)に耕地整理法が施行された直後に耕地整理事業に着手した地域としても知られています。六ツ美地区のうち、中島地区で着手された耕地整理は全国的に見ても先駆的なもので、愛知県内では最初の耕地整理でした。その後、明治39年(1906)から上合欽木、下合欽木、高橋、下青野、福桶、安藤等の地区で連合整理が行われ、明治42年(1909)に竣工しました。大正元年(1912)からは高橋、赤渋、中之郷の連合整理が行われ、大正4年(1915)に竣工しました。六ツ美地区の収穫高は耕地整理や用水整備によって向上していきます。

(5) 街道

岡崎市は、地理的に交通の要地として、矢作川・乙川の水運があり、また、古代からの主要街道である東海道と北へ上る足助街道（別名 中馬街道、塩の道）、三河湾へと続く吉良道など多くの街道が交差しています。とりわけ、江戸日本橋を起点とし京都の三条へと至る東海道は、岡崎の中心部を含む市域を南東から北西に貫き、延長約 20 キロメートルに及び交通の大動脈として機能してきました。

古代、「東海道(うみつみち)」(『日本書紀』)と称された街道は、中世鎌倉幕府の時代には二つの政権所在地を結ぶ道として、政治・軍事・経済・文化的に国内最重要の幹線「京鎌倉往還」となります。当時、街道は菅生川(乙川)南岸を通り、矢作川には渡河点が3か所設けられていたと考えられており、その後、近世に至ると家康公が開いた江戸幕府によって、東海道は五街道の第一として幕府体制を支える大動脈となり、東海道の江戸品川宿から藤川は 37 番目、岡崎は 38 番目の宿として栄えました。

近現代に入ると、東海道に代わって鉄道が主流となり、大正期には自動車の発達により国道の整備・改修が進められました。現在、東海道沿いには往時の面影を感じさせる松並木や町家が残され、岡崎の歴史を物語っています。

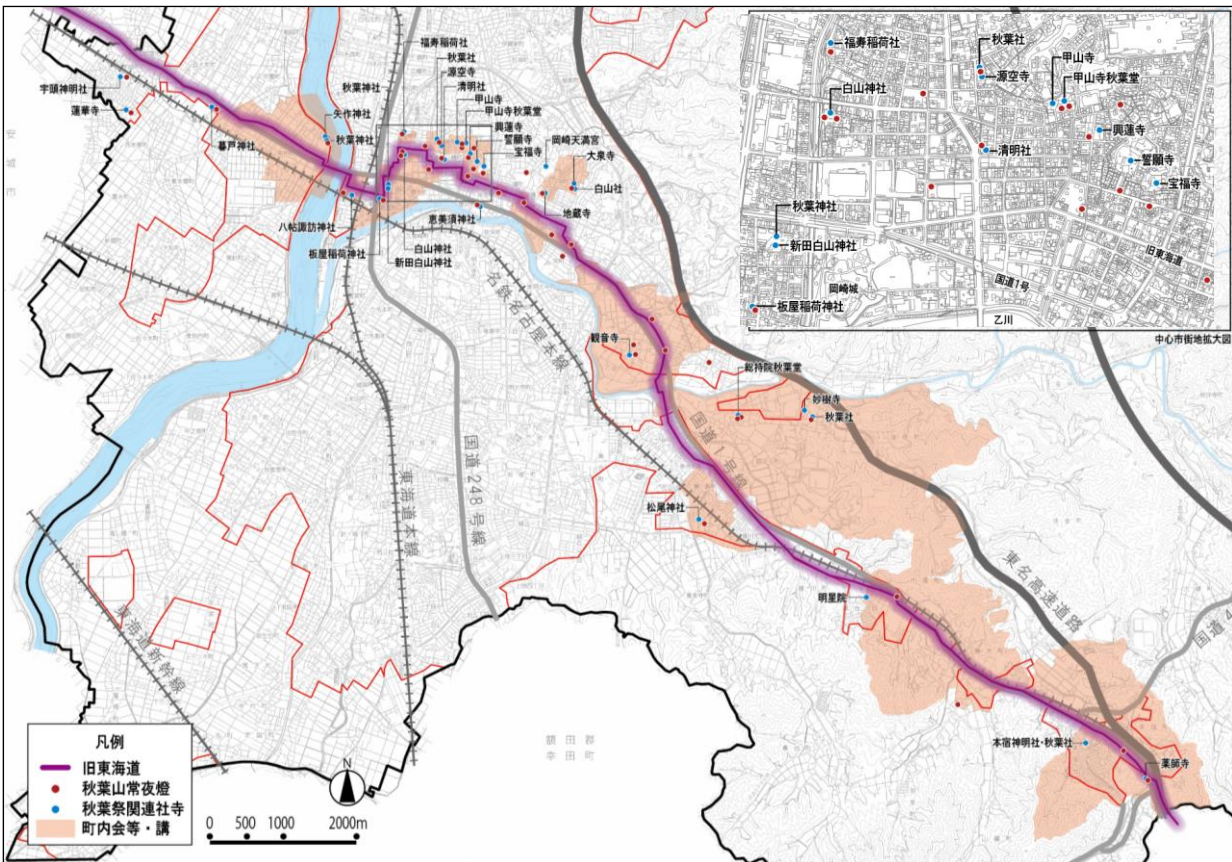


図 5 - 27 現在の岡崎市と旧東海道

(6)治水

乱流する河川であった矢作川に築堤工事を行い一本化したのは、豊臣家臣田中吉政でした。文禄3年（1594）豊臣秀吉は岡崎城主の田中吉政に矢作川築堤を命じます。吉政を総責任とするこの工事の堤防は文禄4年（1595）の洪水で損害を受け、そのあと原長頼を責任者とする再度の築堤により矢作川の一本化工事は完了しました。

そのほか、慶長10年（1605）には幡豆郡小島^{おじま}の狭い丘陵の間を流れていた矢作川を木戸村・藤井村から米津村間を開いて^{わしづかみなど}鷺塚湊へと掘削し、現在の本流の川筋が形成されます。矢作川への川の付け替えも行われ、矢作川本筋を中心とした治水工事により矢作川流域の水はけは良くなっていきました。一方、治水工事の結果、上流からの土砂が堆積するようになり、矢作川は天井川化していきます。流域周辺では池や沼・低湿地の新田開発が進み、これらの開発は大雨の際の遊水地としての機能を失わせ、矢作川へ一気に排水される水は矢作川本筋での洪水を激化させるに至ります。18世紀半ば以降頻繁に起きるようになった洪水は、明治15年（1882）の三島切れの洪水により抜本的な河川改修の必要性を認識させましたが、本格的な河川改修の治水事業は昭和8年（1933）に矢作川が国の直轄河川に指定されて開始された近代的改修工事を待たねばなりませんでした。



図5-28 矢作川を矢作橋付近右岸より北へ望む

(7)建造物

国指定文化財としては、鎌倉時代に建てられた滝山寺の三門や、浄土真宗の拠点であった妙源寺の柳堂、松平3代信光が父泰親の菩提を弔うため創立した信光明寺観音堂などが指定されています。また、3代将軍家光により家康公生誕の地において大造営が行われた際に、造営された伊賀八幡宮や六所神社、滝山東照宮なども国指定文化財に指定されており、大正時代の建物としては、岡崎の近代化を象徴する建物である旧額田郡公会堂及物産陳列所が国指定文化財となっています。

県指定文化財としては、徳川将軍家の菩提寺であり強大な勢力を誇った大樹寺の伽藍や、山田宗徧が建築したと伝えられ、宗徧好みの茶室として唯一現存するとされる淇菴庵並水屋が指定されています。

市指定文化財としては、寺伝によると創建を奈良時代に遡り、室町時代の火災を経て再建された真福寺仁王門や、慶長8年(1603)に家康公が、そして元禄15年(1702)に5代将軍綱吉が再建した甲山寺本堂、安政2年(1855)の火災の後に再建された大樹寺本堂などのほか、平安時代末期ごろに造られたと考えられている切越八面塔、本市で古来より産出し様々に加工されて用いられてきた花崗岩を用いた石宝塔や石灯籠、石鳥居などの石造物の数々も指定されています。

国登録文化財としては、近代岡崎の発展を今に伝える印象的な近代建築である八丁味噌本社事務所や岡崎信用金庫資料館のほか、庄屋の住居が市街地に残る貴重な例である旧石原家住宅、近代岡崎の公共建築である旧愛知県第二尋常中学校講堂や旧愛知県岡崎師範学校武道場などが登録されています。



図5-29 滝山寺三門



図5-30 妙源寺柳堂



図5-31 信光明寺観音堂



図5-32 伊賀八幡宮拝殿



図5-33 六所神社拝殿



図5-34 滝山東照宮拝殿



図5-35 旧額田郡公会堂



図5-36 天恩寺仏殿

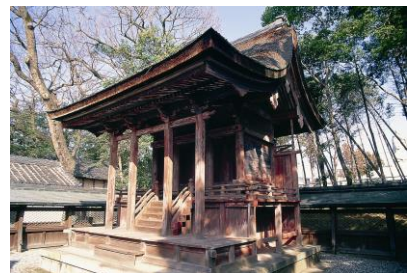


図5-37 上地八幡宮本殿



図5-38 土呂八幡宮本殿



図5-39 大樹寺三門



※非公開
図5-40 淇菴庵並水屋

(8)遺跡

岡崎市は北東側に三河山地とそれに連なる低い丘陵が広がり、南西側には碧海台地が展開し、その間に矢作川とその支流がつくりだした沖積平野が広がっています。この矢作川の袂から、多くの遺跡や遺物が発見されています。

矢作川の流路が今の位置に固定されたのは中世末期以降のことであり、それ以前は絶えず流路が変化する無秩序な河川でした。矢作川では縄文時代草創期から中・近世までの遺物が大量に採取され、矢作川河床遺跡と呼ばれています。矢作川左岸の中位段丘上には縄文時代晩期前葉・中葉の集落を主体とする国指定史跡真宮遺跡が存在し、矢作川流域の北部地域には県指定史跡である岩津第1号古墳をはじめとする市内の約半分に達する数の古墳が存在するなど、人々の暮らしと川の恵みには深い関わりがあったことがうかがえます。

時代を少し下り白鳳時代前期になると、矢作川右岸に西三河最古の寺院が出現します。この寺院は四天王寺式の伽藍配置を有し、過去の発掘調査では堂内の壁面を飾った塼仏や、正倉院宝物にのみ類例が見られる磬形垂飾などの貴重な遺物が出土しており、現在、北野廃寺跡として国指定史跡に指定されています。

豊かな自然の恩恵を受けながら人々の営みが始まった本市は、やがて東海道の陸運と矢作川の水運の要衝として栄え、東西文化の交流点として政治的・文化的にも重要な位置を占めるようになります。徳川家康公の祖先、松平氏は15世紀中葉に西三河にあらわれ、新興武士として勢力を拡大していきました。市指定史跡松平八代墓、松平清康墓・松平広忠墓、松平広忠公御廟所などの松平氏ゆかりの史跡や、県内最大級の規模を誇り、西郷氏または岡崎松平家によりその基礎がつくられたと考えられている市指定史跡山中城跡が残されています。

そして岡崎を象徴し、家康公生誕の舞台ともなったのが市指定史跡岡崎城跡です。西郷頼嗣が松平氏の進出をにらみ築いた砦を端緒とする岡崎城は、やがて松平氏の城となり、家康公が城内で誕生した後には岡崎の中核として岡崎のまちと共に歴史を歩むこととなります。現在は公園として市民の憩いの場となっており、本市の歴史を紐解く重要な史跡として発掘調査が進められています。



図5-41 真宮遺跡



図5-42 岩津第1号古墳



図5-43 北野廃寺跡

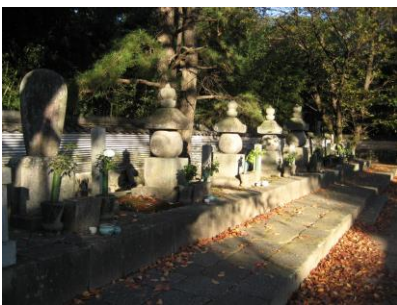


図5-44 松平八代墓



図5-45 山中城跡



図5-46 岡崎城跡

(9) 民俗

本市には田楽や神楽、虫送りなどの祭りや芸能、また東海道などを通して広まった伊勢信仰や秋葉信仰が今も受け継がれ、守り伝えられています。

県指定無形民俗文化財としては、起源を源頼朝の祈願まで遡ると伝えられ、天下泰平と五穀豊穡を祈願する天下の奇祭滝山寺鬼祭りや、豊作と悪魔祓いの願いを込めて行われ、嫁獅子神楽として県下で最も長い伝統を持つ^{ぜまんぢょう}千万町の神楽、県指定有形民俗文化財としては農村舞台である大川神明宮の舞台や、総延長約 50 kmにもおよぶ猪や鹿を防ぐ目的で築かれた^{まんぞくだいら}万足平の猪垣が指定されています。

市指定無形民俗文化財としては、舞木町の山中八幡宮に伝わる豊穡を祈願する祭事であるデンデンガッサリ、六ツ美地区中島町の大嘗祭悠紀齋田^{だいじょうさいゆ きさいでん}が挙げられます。また、虫送りの性格と田の神的要素を持つ御田扇祭り^{おたおうぎ}は岡崎藩の農民支配制度である手永制度^{てなが}と深くかかわっており、毎年一年ごとにマチからマチへと神輿を^{とぎよ}渡御する珍しい祭礼です。華やかに祭事が執り行われる須賀神社祭礼山車及び祭りばやしや、燃える木を持った鬼が逃げる参拝者を追いかけて回し、火の粉にあたるとその年は風邪をひかないと言われる夏山八幡宮火まつりなどの様々な祭礼が文化財に指定されています。

市指定有形民俗文化財としては、江戸時代末期の作となる矢作神社の祭礼山車^{いしんじ}や、渭信寺絵馬群、八帖諏訪神社絵馬群、六所神社絵馬群、矢作神社絵馬群、保久八幡宮舞台^{ほつきゅう}が指定されています。



図5-47 滝山鬼祭り



図5-48 千万町の女 (嫁) 獅子神楽



図5-49 大川神明宮の舞台



図5-50 万足平の猪垣



図5-51 山中八幡宮デンデンガッサリ



図5-52 大嘗祭悠紀齋田お田植え踊り



図5-53 堤通手永御田扇祭り



図5-54 矢作二区・三区祭礼山車



図5-55 須賀神社祭礼山車及び祭りばやし

(10) 美術工芸

本市は古来、京と関東との往来路にあたり、西三河の政治・経済・文化の中心であったことから、歴史や文化の層の厚い土地です。また、家康公生誕の地であり、江戸時代に入るとその威勢は大きく、工芸産業も隆盛をみるようになったことから、地域には古い由緒を持つ有力社寺と、そこに伝えられてきた美術工芸品が多数残されています。市域北部を本拠とした古代豪族によって創建された真福寺や、物部氏、熱田大宮司家、鎌倉幕府、足利氏、徳川幕府と時の権力者により寄進を受けた滝山寺、松平氏や徳川将軍家の菩提寺である大樹寺などはその好例と言えます。真宗教団の発展を象徴する真宗美術品の優品を有する寺々や、近世初頭の絢爛豪華な遺品を多数残している徳川家ゆかりの社寺も同様の意味を持っています。

本市の彫刻は、比叡山^{りょうごんいん}楞^{りやう}嚴^{ごん}院僧栄盛の手による真福寺の木造慈恵大師坐像^{もくぞうじえだいいしざぞう}や、滝山寺に伝わり仏師運慶とその子湛慶によって造られ仏身内に源頼朝の髪と歯を納めたと縁起に記されている木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像、鹿勝川町^{かがつがわ}の庚申堂^{こうしんどう}に伝わる木造兜跋毘沙門天立像^{もくぞうとぼつびしゃもんてんりゅうぞう}が国の指定を受けています。

絵画については、浄土教絵画が多数残されているところに本市の地域特性を見出すことができます。また、仏教の祖師図をはじめとする宗教関係の肖像画と共に、家康公や彼を取り巻く人物の肖像画が礼拝のために製作されました。国指定を受けた絵画としては、妙源寺の絹本著色善光寺如来絵伝や絹本著色法然上人絵伝などのいずれも鎌倉時代の絵画のほか、大樹寺^{おほほうじょう}の大方丈と本堂の再建時に障壁を飾るべく描かれた岡田為恭^{おかだためか}の作となる作品群である大方丈障壁画、浄土真宗に特有の図像構成を示す光明本尊の最古本である妙源寺の絹本著色光明本尊などが指定されています。

工芸では、仏教関係品や調度、武器武具、遊戯具など広範囲のものが存在しています。材料別・技法的に見ると、鑄造・鍛造といった技法を持つ金工品、漆塗・蒔絵・推朱などの技法を有する漆工品のほか、染織品、石造物、陶芸品など多岐にわたります。滝山東照宮に徳川家光が奉納した太刀の銘長光と、徳川家綱が奉納した太刀の銘正恒^{まさつね}が国指定を受けており、昌光律寺の国指定文化財鉦鼓用引架^{しょうこうひっか}は時宗の行脚用に用いられた仏具で、現存するものが少なく資料的価値が高いものです。



図5-56 木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像

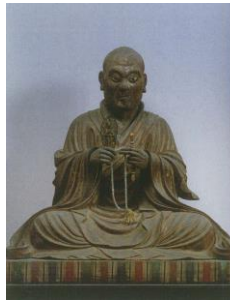


図5-57 木造慈恵大師坐像



図5-58 大方丈障壁画岡田為恭筆
※非公開



図5-59 絹本著色光明本尊 三幅



図5-60 太刀 銘正恒(上)・銘長光(下)



図5-61 鉦鼓用引架

(11) 伝統産業

本市は古くから良質な花崗岩を産出し、石材加工に秀でた職人たちが石工品を作り生計を立ててきました。岡崎石工品は経済産業大臣の伝統的工芸品の指定を受けています。同じく伝統的工芸品として、三河仏壇が指定を受けています。矢作川の水運で運ばれた木材と三河北部の漆を用いた三河仏壇は、寺院の内陣の豪華さを家庭用仏壇に採り入れているのが特徴とされ、その技術は山車製作にも活かされています。

矢作川の水運が育んだ伝統産業としては八丁味噌が挙げられます。600年ほど前から地元の大豆と矢作川の伏流水を用いて醸造されてきたと伝えられる八丁味噌は、現在も江戸期創業の二つの老舗、合資会社八丁味噌と株式会社まるや八丁味噌がカクキュー、まるやの屋号で昔ながらの製法により味と伝統を守り続けています。

岡崎の花火製造の歴史は家康公に仕えた稲富伊賀守直家による砲術・火術（稲富流火術）に遡り、三河花火は夏の華として市民に愛され続けています。また、かなめ染め武者絵幟^{むしやえのぼり}は江戸時代中期に職人町・三河国土呂（福岡町）で誕生し、今も熟練の職人の手で技術が受け継がれています。

「やはぎの矢」は明治3年（1870）、静岡県三ヶ日にて矢師となった初代小山嘉六に始まり、伝統的な製法により代々竹矢の製造に取り組んできました。70もの製造工程を持つ竹矢づくりの技法が、今も3名の矢師の手で後世へ伝承されています。また、この地方独特の祭り囃子で演奏されるちゃらぼこ太鼓と呼ばれる太鼓が、慶應元年（1865）創業の太鼓店により製作され続けています。明治20年（1887）代前半に伊勢神宮へ参拝した石川米吉が神宮のしめ縄を参考に開発したことに端を発する大門のしめ縄づくりは、今も手作りで、本物志向により注目されています。また、三州岡崎和蠟燭は木蠟を原料とする和蠟燭で、仏事を始め寺院・茶道・記念行事など幅広い用途に用いられ、根強い需要があります。



図5-62 三河花火